英国成人の5人に1人、GLP-1薬使用者を受けて社交習慣を変更 調査

GLP-1薬の影響は患者本人にとどまらず、友人の飲酒や外食、食事中心の外出にも広がっているという調査結果

2026年11月23日（月）



市場調査会社Escalentの新たな調査によると、英国では、GLP-1減量薬を服用している知人がいる成人の相当数が、自らは薬を使ったことがないにもかかわらず、飲酒や食事、社交のあり方を変えている。

Escalentは、同社が「エコー消費者」と呼ぶこうした人々が、英国の成人の最大5人に1人を占める可能性があるとした。調査では、英国のエコー消費者はGLP-1薬の使用者の2.2倍に上り、薬の社会的影響が服用者本人を大きく超えて広がる可能性が示された。

調査結果からは、飲酒量の減少や、食事・飲酒を中心とした社交の機会の減少がうかがえる。共に

過ごす機会に変化があった英国のエコー消費者のうち、26%は自身の飲酒量が減ったと回答し、17%はGLP-1薬を使っている知人と飲みに出かける頻度が減ったと答えた。また、7%は集まりに持参する飲み物を変えたという。

変化は飲酒にとどまらない。Escalentによると、調査対象者の35%はGLP-1薬使用者と外食する際に注文する料理を減らし、27%は食事や飲酒を中心としない活動を選んでいる。また、36%は集まり用に買うスナックや菓子を減らし、21%はそうした機会に持参する食べ物を変え、24%は薬を使っている知人への贈り物を変えたことも分かった。

この調査は、英国の成人1,602人、米国の成人1,349人を対象に実施された。Escalentは、この傾向は服用者本人に対する薬の直接的な影響だけでなく、友人や同僚、より広い人間関係の輪が消費行動を変えていることを反映しているとした。

Escalentの欧州担当マネージングディレクター、Melissa　Baneは、これまで企業の対応は主にGLP-1薬の使用者本人に焦点を当ててきたと述べた。一方、周囲の人々も使用者に合わせて自らの習慣を変え始めるなら、そうした見方は狭すぎる可能性があるという。特に、菓子や酒類、贈答品への支出が通常増えるクリスマスシーズンには、その影響が大きくなり得る。

薬の使用者から周囲の人々へと飲酒需要の減少が広がれば、こうした波及効果は酒類業界にとって重要な意味を持つ可能性がある。ワイン、ビール、スピリッツの生産者に加え、スーパーマーケット、パブ、バー、レストランにとって懸念されるのは、支出の減少が比較的小規模な患者グループに限られず、グループでの集まりや贈答品の購入、外出にも及ぶことだ。

今回の報告書は、GLP-1薬が食品・飲料の消費に影響を及ぼしていることを示す証拠の蓄積に加わるものだ。Harpersは3月、薬の使用中は、家庭で消費する飲料への支出が22%、バーやレストランなど店内飲食施設での支出が30%減少することと、薬の使用が関連していると報じた。

Escalentの新たな調査は、こうした二次的な影響にも同程度の注目が必要になっている可能性を示している。薬は患者が自分のために買うものを変えるだけでなく、友人や家族がパーティーに持ち寄るもの、飲みに出かける頻度、選ぶ社交活動の種類も変えている可能性がある。

Baneは、チョコレート、酒類、クリスマス用の詰め合わせ、食後のミント菓子など、クリスマスの集まりと長く結び付いてきた品目が、薬を使ったことのない何百万人もの人々にとっても、メニューから外れる可能性があると述べた。こうした変化が人間関係のネットワークを通じて広がり、より幅広い買い物客に影響するなか、消費財ブランド、小売業者、レストランは、ぜいたくや祝賀、共有体験をめぐる期待の変化にどう対応するかを見直す必要があるという。